

私には 光がある

声楽家・ピアニスト

北田康広 さんに聞く



伴奏は陽子夫人（写真左）。なれそめは、バス停で雨に濡れていた北田さんにそっと傘を差し出したこととか。

もし見えるようになったら、
夜空に輝く満天の星を仰いでみたいです。

音楽に救われた

北田さんは未熟児網膜症で生まれ、医療ミスも重なって五歳で失明しました。今でもわずかに光を感じるだけです。六歳で盲学校に入学、高校を卒業するまで寮生活を送りました。その間、彼を支えるはずの家庭は荒れていました。父親の養鯉業は大当たりしましたが、そのお金を、息子の目を治したいばかりに母親はいくつもの新興宗教に貢いだのです。金儲けに夢中になる父と、宗教にすぎる母。両者のケンカは絶えず、とうとう

離婚することになりました。

ほどなく父親は再婚しましたが、継母は北田さんに辛くあたりました。学校でもいじめられていた北田さんにとっての唯一の救いは音楽でした。ピアノを弾いている時だけがすべてを忘れることができたからです。

高校卒業を前にして、北田さんはだれもが進む鍼灸師の道ではなく、好きな音楽の道に行きたいと強く思いました。この思いに生涯の師となる担任の吉村先生は、「目が見えないからといってあきらめてはいけない。やってみなければわからない」

と言って励ましてくれました。そして無事に筑波大学附属盲学校音楽科に合格することができました。

北田さんはさらに音楽大学を目指しました。朝でも夜でも時間があればピアノに向かい、晴眼者の何倍もの猛練習をしました。その努力が実り、晴れて武蔵野音楽大学に合格することができました。大学を卒業した後、洗礼を受けクリスチャンとなりました。現在は、歌とピアノ演奏を交えた「心の瞳トークコンサート」を全国各地で行っています。

見えないことに意味がある

——伸びやかな声をお持ちですね。

私には
光がある

聴いていて心が洗われる思いがしました。ところで、北田さんはご自身の障がいをごどのように受け止めておられますか？

北田 神様の側の理由で今は見えないのであって、おそらく目が見えない私を神様が必要とされておられるのだらうと思っ
ています。見えないがゆえに、逆に見えてくるものもたくさんあると
考えています。

——どんなふうにして楽譜を読まれる（覚えられる）のですか？

北田 耳から聴いて覚えませんが、正確に聞き取れているかどうか、演奏記号や指使いなど、譜面の細部については、数種類の楽譜で確かめるようにしています。

昔は入手困難だった点字楽譜も、

今ではパソコン点訳の発達により、豊富な資料を手にすることが可能となりました。これもひとえに、点訳ボランティアのお陰です。

ピアノの場合ですが、私は左手で楽譜を読みながら、右手で弾きます。左手で弾くときは、いったん読んでから、鍵盤に指を移動して弾きます。目が自由な分、記憶力や暗譜力、そして想像力が大事です。信じられないでしょうが、筑波に行くまでは、個人レッスンを受けたことがありません。自己流で弾いていました。

——吉村先生は、どんな先生でした

か？

北田 理数科を教えられ、きびしくて怖い先生でした。でも、愛にあふれて、どんな人でも分け隔てなく接してくれました。クリスマスチャンだったのです。先生は学業が遅れている人には、その人なりの課題を与えるという一人ひとり違う指導をされておられました。

音楽の道に進みたいという私の思いを知った先生は、誰もが反対する中で、「神様が道を開いてくれるならどんなことも可能になる。可能性がゼロでない限り、やってみるべきだ」と言
って、後押ししてくれました。あとからわかったことですが、もし受験に失敗したら、ご自宅

コンサートの感想

「目をつぶって私と同じ暗闇の世界で聴いてください」と熱唱された「マイウェイ」。ビンビンに心の中に飛び込んできて、涙が出てしまいました。(Aさん)

「障がいは個性の一つだ」と笑顔で話される姿に驚きと感動を覚えました。そこにはもはや困難を乗り越えてきた人にしか醸し出せない雰囲気
が漂っていました。(Bさん)

「誰でも内なるエネルギーを持っている」と言われて、すごしげれました。弱音ばかりだった自分でも夢が叶えられるんだと思いました。
(Cさん)



明日への希望を生み出す

——吉村先生との出会いが、今日の北田さんをつくったという感じですね。北田さんにとって音楽はどのような存在ですか？

北田 生活の大部分を占めるも

で私を預かることも考えられていたようです。

初めてキリスト教にふれたのも先生を通してです。放課後、キリスト教音楽の重要性とか、福祉とキリスト教の関係などを教えていただきました。後年、先生は私の讃美歌アルバムに曲目紹介を寄せてくださいました。初めて人前で歌ったのも、先生が連れて行ってくださった礼拝
でした。



ので、呼吸とも言えるかと思いますが。朝の練習はたいいていバツハの曲から始めます。バツハは、すべての曲を神様の栄光のために作ったというだけあって、その音楽は感動に満ちています。弾きながらだんだんと祈りへと導かれていきます。

そんな素晴らしい音楽に日々接することができるとは感謝です。私は自分の音楽活動を通して、多くの方々に勇気と希望と愛をお届けしたいと思っています。

——どんなことを大切にしておられますか？

北田 一つは、「あたりまえ」の意味です。井村和清さん*

が作られた「あたりまえ」という詩があります。「そのありがたさを知っているのは、それをなくした人たちだけ。なぜでしょう。あたりまえ」という言葉で締め括られています。私はその詩にとっても共感しました。

生かされてある命の本質を問う言葉だと思ったからです。普段「あたりまえ」と思っていることが、実はそうではないのです。きつと、それらを失った時、本当の意味がわかるのかもしれないね。

二つ目は、「大切なものは目には見えない」ということです。これはサン・テグジュペリの『星の王子さま』に出てくる台詞です。人はとかく、目に見える

ものだけで物事を判断してしまいがちです。実際、情報の九〇％は視覚からと言われています。本当に大切なものは、目には見えないものです。

三つ目は「命」についてです。自分は何のために生かされているのか、自分の役割はいつたい何なのか。それに気づいたら、人それぞれに役割があつて、存在価値があるとわかります。だからベストを尽くして、自分らしく生きていくのです。人を羨むだけでは、持っているものさえ小さく萎んでしまいます。自分の輝きを大切にしようとしたとき、希望が見えてきます。

*「飛鳥へ　そしてまだ見ぬ子へ」の著者

神のみ業が現れるため

——どんなときに幸せを感じますか？

北田 自然が好きなので、水が流れる音や野鳥の音を聴いた時です。野鳥の名前を、その囀りによって、数十種類聞き分けることもできます。自然の音は、神様のお心が現れているように思います。それから、生かされている喜びを感じるときにも幸せを感じます。

——最後の質問です。これまでの歩みを、どのように受け止めておられますか？

北田 マイナスとしか思えないことでも、生きて働かれる神様

がプラスに変えてくださったと実感しています。幸いなことに、母とは十歳の時に別れてから二十年ぶりに再会することができました。美容師だった母はこちらに出てきて店を開いたので、少し前まで母に髪を切ってもらっていました。酒乱だった父は十年ほど前に亡くなりましたが、亡くなる直前、あれほどキリスト教を毛嫌いしていたのに、孤独に打ちひしがれて吉村先生に電話をして助けを求めたそうです。

読みたいときにリアルタイムで読めない、行きたい所に一人では行けないというように、目が見えない不自由さがあります。同伴者と一緒にいるとき、私に

直接話しかけずに同伴者に私のことを聞くと、さびしさを感じます。でも、物事を前向きにとらえ、ただ神のみ業が現れるために、ひたすら神様を信頼して歩んでいこうと思います。

(取材 齋藤)



きただ やすひろ

1965年徳島県生まれ。徳島県立盲学校、筑波大学附属視覚特別支援学校（附属盲学校）専攻科音楽科、武蔵野音楽大学音楽学部器楽学科有鍵楽器専修ピアノ専攻各卒。

東京バプテスト神学校神学科卒。第31回ヘレン・ケラー記念音楽コンクール第1位受賞。第18回全国身体障害者スポーツ大会陸上競技2種目で金メダル獲得。ピアノを足立勤一、故若尾輝子、マックス・マルティン・シュタインの諸氏に師事。歌を人見共、新垣勉、中山文雄の諸氏に師事。（なお、新垣勉氏は、同じ大学の13歳年上の後輩にあたる）